

白川静のことば  
 《20》


金子都美絵・画

巫女ふじよが両手をあげ、首をかしげて舞いおどる形。〜中略〜  
 両手をかざした形が、たまたま竹の形に字形化されたもので、  
 それは同じく巫女の狂舞する姿である若（若）が、かざした  
 両手を艸くさの形に字形化されているのと同じである。天あまは身を  
 くねらせて舞う人の形。若は巫女が両手をかざして舞い、神  
 託を受けようとしてエクスタシーの状態にあることを示す字  
 であるが、笑は笑いえらく状態で神意をやわらげようとする  
 もので、これも一種の呪儀じゆぎであった。「段注本」に竹と犬とに  
 従う形の篆文てんぶんを出し、哭なくが犬に従うのと同じ理由で、笑も犬  
 に従うのであると論じているが、人の哭なき笑いをどうして犬  
 を借りて示そうとするのか、まことに笑うべき説である。笑  
 とは神に対するもので、もと神事的な行為である。〜中略〜  
 笑の従う天あまは、妖ようの初文。妖・笑はいずれも巫女の呪儀をな  
 す妖幻の行為をいう。示部の禊うは地妖、妖・笑の属は人妖。  
 神と人との世界は、この笑において相接し、相樂しむのであ  
 る。

(新訂『字統』平凡社P456【笑】の項より)

